

【思考は現実化する】

自己啓発や成功哲学の源泉でもある『思考は現実化する』というフレーズ。この言葉は当然あなたも耳にした事があると思います。

これは、1937年に出版された、成功に対する哲学を書籍にしたものの邦題で、当時雑誌記者だったナポレオン・ヒルが、アメリカの実業家アンドリュー・カーネギーと出会い、カーネギーの尽力を得ながら著名な各界成功者500名以上の協力者を得て体系立てたものです。

英語では「Think and Grow Rich」というタイトルで、考えてリッチになろう！という意味です。

本手引きでは、『思考は現実化する』という言葉について考察していきます。

まずは、思考、つまり考えるという事について深めていきましょう。

さて、現代は情報化社会です。一説によると、情報量において、ここ一年で発信された情報量が、過去5,000年で人類が発信した情報量と匹敵し、更にその情報量は、年間倍になっていると言われていています。

また、別の角度で表現すると、江戸時代に生きた平民が一生涯に受信する情報量は、現代の日経新聞7日分に掲載されている情報量と同じだとも言われています。

昔と比べると、なんという情報量の多さでしょうか。

また情報を発信するという点において、遙か昔は石に情報を刻んだり、壁に描いたり、紙に記して残すなどの方法で情報を発信してきました。ですので、情報を発信するには石・壁・紙などの物理的な媒介が必要でした。故に情報量と記録物の量は比例関係でした。

昔は、紙は庶民が簡単に手にできるものではなかったため、情報は一般人が簡単に発信できるものではありませんでした。しかし、現代はデジタル化が進み「ブログ・ツイッター・フェイスブック・インスタグラム」等のSNSの登場により、誰でも、スマートフォンやPCなどのデバイスがあり、インターネットに接続できる環境があり、後は意志さえあれば手軽に情報を発信できます。そして、発信先はデジタルですから、情報量と物理的記録物の量は決して比例しません。

インターネット上には、収集しきれない量の情報が存在しているのです。そしてそれは、毎日増え続けているのです。

脳大成理論の手引きの根底にあるテーマは『自分で考えて、自分の本物さや答えを見いだしていこう』という自己哲学主義（セルフフィロソフィズム）です。

思考の素材は情報です。では、昔と比べこれだけ情報が多いのであれば、現代人はよほど思考力に長けていてもおかしくないのですが、本当にそうでしょうか？

わたし達が一番危惧すべき状態は『思考停止』です。思考停止状態は、イコール依存状態であるとも言えます。わたし達は、情報をそのまま鵜呑みにせずに、一旦自分で咀嚼して、その意味や内容を多面的に捉えたり、再考察したいのです。そうすることによって自身の血肉となるのです。自身の哲学となるのです。

さて、2019年5月28日に神奈川県川崎市にて発生した通り魔殺傷事件。結果として被害者のうち2名が死亡し、18名が負傷しました。犯行の直後、加害者は自ら首を指し、その後死亡しました。

また別の事件では、2015年6月9日走行中の東海道新関せ社内で男女3名が刃物で襲われ男性一人が死亡するという事件が起きました。容疑者は「むしゃくしゃしてやった。誰でもよかった。」と供述していました。

おそらく、神奈川の事件も犯人は「誰でもよかった」なのでしょう。こういった事件が起こると口を揃えて「痛ましい事件」「痛ましい事件」とコメンテーターは言います。確かに痛ましい事件であることは確かなのですが、わたし達は常に立ち止まって思考するあり方を取りたいのです。

犯人が言った「誰でも良かった」というのはどういう意味なのでしょう？これは『誰でも良かった=全員を憎んでいた』と言えるのです。つまり、私も憎まれていたし、あなたも例外なく憎まれていたのです。あなたも上記の事件において、当事者だったのです。そう考えた時に、この事件に対する受け止め方が変わってきませんか？この事件に対し、対岸の火事のような受け止め方にはならないはずです。だってわたし達も当事者なのですから。

思考停止は、わたし達の脳の成長や発展に極めて重要な情報体験という機会を奪います。だからこそ、情報を立ち止まって考えるわたし達のあり方を確立していく必要があるのです。

わたし達は、様々な原理や法則を既に知っています。人生を構築していく上で重要な原理や法則を既に知っています。例えば、「言葉で人生は変わる」というもの。脳大成理論を学んでいるなら少なくとも初めて聞く言葉ではないはずです。または『脳が全てをコントロールしている』というものや『全ての問題の原因は脳の不活性である』といったもので。

上記の原理や法則に疑いを持っている方はいないと思います。どれくらい実感しているかは別問題として、上記の原理や法則に同意していることと思います。

それでは、わたし達は上記の原理や法則に対して

『本当にそう思っているのでしょうか？』

これこそが本物さと強い関係があるものです。本当にそう思っているのであれば、今わたし達の悩みは悩みとして存在し続けるのでしょうか？あなたの課題や目標に対する取り組みや未来への希望は今のままでしょうか？

本当にそう思っているのであれば、今よりもはるかに違う次元で出来事を捉えられるはずです。

ではなぜ、実感が薄い、もしくは本当にそう思っていないのでしょうか？

それは、物事を自分で思考せず、鵜呑みにしているからなのです。鵜呑みにしては、あなたの哲学が深まることはありません。自己哲学としてあなたの血肉にしていくには、その物事を立ち止まって自分で考えてみて、角度を変えてみたり、自分や自分の状況に置き換えてみたり、表現を変えてみたり、他の物事との関係性を探ってみたりする必要があります。自分で考えてこそ脳の成長や発展があるのです。確かに考える事は膨大なパワーを要します。考える事は時にとっても面倒な事です。脳の不活性の三大要素である「逃げる・言い訳をする・開き直る」という反応は、その対象となる事象について考えないことから始まります。わたし達はどんな物事も熟考するわたし達を作っていきます。さて、上記の視点で『思考は現実化する』という意味を考えた時に、疑問が湧いてきます。まず、多くの方が『思考が現実化』しているのではなく『現実が思考化』してしまっています。

「思考は現実化するのだから、良い事を考えれば良いことが起こるんだ。だから、良い事を考えよう。でも、良い事を考えていたのに、現実が全く伴わない。自分にとって嫌なことが不都合な事が起こる。全然思考は現実化しないではないか。私の周りの人や出来事は、こんなに嫌なこと、マイナスな事ばかりだ！」と、例えばこんな具合です。こうなると負のループで、どんどん自分の望まない方向へと進んでいきます。これは、思考は現実化するという本質的な意味をはき違えていると言えます。

思考イコール、想像したこと・イメージしたこと・願ったこと・望んだこと、口に出して言ったこと・文字として書いたこと、などと思っているのではないのでしょうか？

今、あなたが象を想像したからといって、目の前に象が突然現れることはありません。あなたが紙幣が積まれていることを想像したからといって、突然目の前に積まれた紙幣が現れるはずもありません。お金が儲かった！とあなたが口に出した瞬間に突然売上が上がることも収入が増えることもありません。それらはつまり妄想です。

脳大成理論でも力強く提示している法則に『BE・DO・HAVE』というものがあります。ここでは、この法則や意味については詳細に言及しませんが、想像する・イメージする・願う・望む・口に出す・紙に書く、などは全てDOです。これらは全て方法です。

大原則として、BEがDOとなり、HAVEとなるのです。つまり、現象の源泉は「BE」なのです。つまり、「思考は現実化する」という言葉が意味する思考は、在り方を指しているのです。言葉を変えるなら、生き方・生き様とも言えるでしょう。脳大成理論の言葉なら「本物さ」と言えます。

詐欺師は人を騙します。人を騙して金銭を得ます。つまり、BE=詐欺師、DO=騙す、HAVE=金銭、という図式になります。在り方が詐欺師なので人を騙すというDOを選択するのは。どこまでいっても「在り方」があって「方法・やり方」になるのです。

つまり、思考は現実化するという言葉を言い換えると、在り方は現実化する・生き方は現実化する・生き様は現実化する、という事なのです。その在り方によって、考え方が生まれ、考え方によって、あなたの感じ方や思い方に反映するのです。あなたの考え（いわゆる思考）は在り方から生まれるのです。

わたし達が、在り方をより本物さに磨いていくなら、そこには「考える」という行為は必須となります。「本当にこれでいいのだろうか。」「私が本当に望んでいるものは一体何なのだろうか。」「私は相手に対して本当はどう在りたいのだろうか。」などと考えることでより本物さが見えてきます。

1つの物事を熟考することで、その対象を多面的に捉えることができます。

例えば、『思考は現実化する』『意識は現実を創造する』『イメージすることで現実は変わる』『言葉によってあなたは作られる』『念ずれば花開く』『SOS理論～そう思えばそう』などと多面的に捉えていった時に、その表現している対象をより掴むことができます。しかし、その全体を表現することはできません。表現した時点でそれは部分となります。

『捉えた対象は全体だが、表現すると部分と化す』のです。ですので、その捉えた対象は『輪郭（りんかく）の無いモノ』となるのです。

この、輪郭の無い概念こそがプラトンの言った『イデア』です。イデア論において、こんな表現が用いられます。

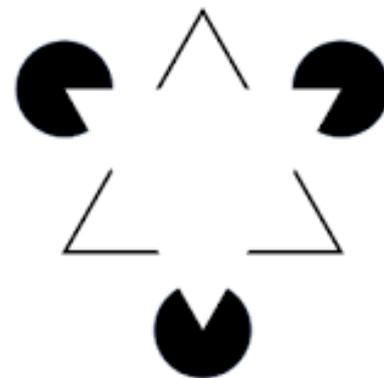
『現実には完全な球体は存在しない。重力が働いていたり、大気には圧があるからだ。しかし、完全な球体は存在する。それがイデア界なのだ。』

つまり、上記の表現と全く同一です。『捉えた対象は全体だが、表現すると部分と化す』のです。

そして、輪郭の無い概念を捉えていく事こそが、データフィールドのレベルを上げていく事となります。輪郭は制限であり拘束です。故に、輪郭の無い概念こそが真の自由なのです。

例えるなら、カニッツァの三角形の錯視のようなものです。

右図にある、実践や欠けた円が部分的な概念です。しかし、部分的な概念を輪郭はつきり捉えてこそ、内側の描かれていない三角形がはつきりと見えてくるのです。



『思考は現実化する』という、既に当たり前に聞いたことのある概念も、それこそ『思考』することによって、その真の姿が見えてくるのです。